

これからの水との
付き合い方考える

ダム工学会
語りべの会

ダム工学会の若手の会は26日、東京・本郷の東京大学山上会館で「語りべの会」を開いた。昨年9月の台風12号で熊野川水系下流が洪水に遭い、原因は事前放流をしなかった発電用ダムにあると報道され

本庄正史ダム工学会長



たが、なぜ、ダムの放流が正しい理解を得られないのかについて、同会が検討した成果が報告されるとともに、参加

者による討議が行われた。

冒頭、若手の会実行委員の石田哲也東大教授が「これからの水との付き合い方を考える」との検討結果を報告した。この中で石田教授は「発電用ダムにはそもそも洪水対策に関して規定が存在しないばかりか、発電以外の運用は法令違反のだが、地元首長らは運用規定そのものが利益優先だと批判している。東京の水ガメである多摩川上流・小河内ダムも目的に治水がないので、類似のことが起こりうる」と話題を提起した。このあと、▽発電用ダム▽利水と治水▽報道――のあり方について討議し、分かりやすいダム用語の解説やダム操作・運用の説明、マスコミや一般市民へのダムに関する正しい理解などを指摘した。また、前土木学会長の阪田憲次岡山大名誉教授が語りべとして「ダムの役割を考える」をテーマに講演した。